幽郷真語 全

ヲ6
5438

桃岡八田先生箸

幽郷真語　全

尾張　奎文閣藏梓

奎文閣

幽郷真語とし加紀

今はむかし我が友ふ本村何某と云ふ人ありけり。呼名を力藏と云ひき。裝束は衣紋といふことを習ひて。ひろく人ふ交はる人なりけり。今指をくりて數ふれば。文化三年といひし年の春の頃なりしが。語りもつぱらくハ此かど薩摩國もらゐ殿の御内なる伊木何某てふ人ゝ聞る事ありけり。そは彼国の霧嶋山なる出流明磐を製ち陸ゝ所ふ使ハ流ゝ小者ゝ何某とう

慶應大學

云男有て、ある日おもかえ岳、彼山より鎮まり居まし
女仙の許より行ふうしが、其後もをり〳〵往來して、
おろかくれ事どもの事乃由、詳ふ知て如と語れる
を、已もとより然るべきぢれ事どもは、おかろうふ聞
おぼし得ぬ性なれば、いろで其をのおよ直よ巻て、
問はゞやと思ふど、國放れくばせむ便なく、せ免て
はその伊木氏ふ、ゞ〳〵ふ聞バやと思ふよ、其如てさ事
れくて過しぬるを、其後如ふ此事の忘られぬ年

ふる間よ、頭世幽世のちうひ別ある故由をも、もたゞく
ふ委く思ひ得るふ就てハ、霧島山ゆる神界ことれ、
いうでゝ〳〵と思ふわゝとゆ乃ふ前のおと如年ふかの
御内ある大橋昌尚てふ人、初めて我門よ入れるよ乃、
其紹介ふて、其国の殿人ゆ乃ちも、次〳〵ふ乃ゝと名簿
を遣せて、教へ子と形ち流中よ、木村鈴蔵と云ふ人
あゝ、呼名を休右衛門とふ、歌もよく詠み、書如め
さる物もたれる事有ゝと聞ゆるふ、彼をのこゞ、霧島

山の神のさうひに至きは實を尋ぬれば其いと正
しき物語りあり吾も久しく聞かゝら居れど今師
のかく問ふまへだ国に帰らむ後に友さひとひ正
して書記し見せ奉らむと云ふに返しく勸めや
まで却さて後に消息にるざとに何ぞと催がしやま
ぬに猶聞たてぬ事ゆゑぞ熟くとひ畢てこそと云を
いと待とふる間に悲しき死うも去年は五月に鈴満
ハしも身ゆらぬ故また誰ふうも誘へむと歎き居
れるに今とし三月池田武純といふ人の來れるに
此事を問へば委しく聞ゆもてる事もて有ると
やがて其事ども記し見せて猶國なる友ふも問
やとてきさえ申さむと云しは往し卯月に始れも
き斯てさの八月なりて其の幽郷眞語をもて來
て國なる友のもとよりと彼女仙の事かく書記を
遣せ侍りといふに悟しなぎと云むも世に記なれて
取る手も遲しと披き見るに奇くも此を記せる

ゆしの殿の仰せごと承賜はりて、其邊を見廻らはゞ
時しも、田くゝるく其男ふまた六月を達て問明せる
事をし、かく詳ふ記取られたる文辞の、何やゝ調
へる學びの力は云ふも更なり、其男のけたひ人ぐら
面もちけ、ふ、今さくふ正目は見ぬ如く、物せられ
し眞語のいと辱く、三十とせ近く神ふけ、ふまひ願
申せる事の時のもけきば神のもはし聞え給ひて、
かく知しめ給へはよまそと、尊く覺えて、おそれて鏡

胤として、常ふ齋く神の御胤の前ふ捧げて、拜み
ゆゝ、ふ、ぎ謝まゝさせたる事は、池田氏はそまゝ居
ゆひて見られしの胤が如し、然るは神世の神さち、既
ゝ顕幽ゆゝ、ふて、おそ現まて見え給ち祢、神ふぐゝ
常しへふ鎮まて坐ゆまと、何ゝ疑思ふぎき、然るを
今の危人の、其御形を見奉る事ふ記故ゝ、崩御まし
ゆとおもてむは最も忌く、ちく愚胤ふ心ゆりゝ、
抑神の御上も、神の御典を讀伺ふはゝふ、最も尊く

いとも畏ク御事とは想ヤマ奉らるれど正目ヲ拝
み奉らむヲは又殊ヲ尊さの類いかく其御稜
威の彌増マさおはし坐さむと思ひ惟い奉るもれうう
然る事おらさめを如何せむ三ら流をおの善五郎
をのと又さクヲ寅吉と云へる童子ハ行まと年は
氏神仙ヲ仕マ奉れるヲどは正しく神の許して其
界ヲ入し免給へるヲきば殊ヲ流御靈を蒙れるヲぞ
有べき斯て此童子は御暇賜タマて後ク予が家ヲ

來きるを數年と免おきて懇ヲ問ひさくろむるヲ
我が古道の學びれうヲ思ひ得さる事ヲうらば
是はく尊く辱ク事ヲこそ行てれ吾黨の人々よ是
等の眞語を承賜ハマて今しも神世の神くハ人の
目ヲこそ見えまけ孫堅石ヲ常石ヲ御坐にべき
理を辨へ人ハ世と為りての後も千世万世も長ら
ふる神仙ハ多く坐まハ事をも知マ世ハと幽世の
有狀の靈く畏き事ヲも悟マ称うし故天の書

たゞされとる。八田越しに此を傳へられとる池田氏ふも此悦び聞えゞてら。ゞゝ此よしをかき添るしおむ。時に天保の二年といふ年九月廿四日四日

といふ日。

多ひら九篤胤

霧島山遊郷真語

○今年天保二年の夏おほやけ事ありて薩摩国日置郡伊集院郷市来(延喜兵部式に薩名とあり中所載市来郡此)にものしけるほとなれる池田武純うじ江戸の御邸より清書してよこしはしめて平田篤胤翁を訪ひけるふみ古史伝と云書を著はさるゝを付て用をらるゝ事共のあめるを故白尾大人(白尾新蔵)に図抱山陵考を法かもしてよ又かの霧島の奥様なるのぬ僕某ら他境に流れアトと云事の始末をも一巻に書紙にてふと云おこせてこりかの仏法の一寺事ハしもをやくゝりもれゆえて世れかなゝゝひ苦めもをこはやをれと今そをかい他さんみはは

からさまにもそのしかるべくかよう往還もはしるべくれた
さはらに水海のあるさまふぜいとをかんとあらてハなもやし
うゝさはるさまなる流かれ其今ハいはくふかるやらむそれ
はゝたゝうなふ初ハとかくくとみおもはゝしらるさるゝと
もてなやみ居るほとなるふあやしいうれる関(チキリ)ゝなゝん
かれ其をも即(アカテ)ゝたひやとわにしてゐるゝうれしふと
えゝらんはおろゝふおそちるハをふにうしはもと薩(ケ)ゝ
仔集院ゝ神川村の百姓(メシ)ゝとうゝ少し事をわのくおほえ
○けるゝ其神川村の名ハ此市来ゝおもありてやゝて伊集院
の神川と濁(ニゴ)きるゝ所ゝ此の後ハおれゝらそこあゝりゝも

ものゝ多へき事れあふれもにいてふたつ給えをやと思ひ
居るゝとゝるゝ市来ゝ湯田村の事ゝ湯りてゝ月廿八日ゝ月ゝ
仔作田村ゝ移りぬゝよゝ神川ハ中里金の所ゝふれい先あ
るゝれ其ゝうとゝえゝる流呼出ゝかの一辛事をねおてそ
さ出そいかふゝ及ゝをやと思ひけれゝいてそハ神川ゝハ
はゝらゝ十里ゝこそさるゝもれハ侍きをめてそれゝそ侍
らん即名ハ改ゝうとゝ侍りとゝえゝるハまことゝ胸ゝふ
るゝ事ゝきゝてさゝはゝゝいまゝてあひみむあゝいゝ
ひゝとゝいへゝいゝゝゝとよゝかのお侍ゝる事をハゝれゝ家人
ともものゝ侍りゝ侍ゝ侍ゝゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝとて即

そを幸て来けり荒田の村なる孫左ゑもんとかゝれもやらぬ
甚経きをあらそひ煙草入投けるまゝ成ふ古びたる山
猫ありけるをいきとせられたきは使やかみたるくよれば
その男ふて月はかゝるきと脇子は兒のおとくゝ泣るりさて
ひくふるに直朴ふるすみて言語ふとかゝこからにかの
物語をいふむけーきハふけきと始終り細ふ倍後ろ事
のかゝくけふ見ゆ見れもこふくより心してかゝやゝれ事
はふりしやふとしかくみ四紙能ーてゆとりたるそ
のむ後をゆゝに記ふあるりにあやーき事れちまふをいもーい
もゝゝかふくきるゝれハ侍ふ先の心ふひやふれやを里人ともにも
くゝーくゆひくゝーるふひくゝふるふ五ふるもれみて外りの初をも

まめやゝみーていさてうも見ゝふる事をふきに
ゝゝかゝーきくゝもあらにとゝあり

○改方つは薩摩五日至敬市来に伊作田村久保園つの出る情
う三男也はーめは吾五郎とそいひー寅年に宮日ふ生れ
たるふよりて左ゑを虎と云へりあとー古拾二歳にあり
ぬ十二三の間ふり不にふよくの居ることを以て枝ふとに
くふさまハちふかゝ猫のやゝふりーと里人ともいへり
○さて酒をたゝ多はゝりもえのまにたゝれとる事ふとを人
ふみみもえいたぬやとの生使く歯ハ一二おちぬりたきと
ゆゝいとゝこやゝふ田畑に事ともよく初もの巫とふん
拾五歳ふ成りー時ふりー稼畑の仕樊山に雇たき入とふり

てそなふ世六年ありきそれより長枝ちふ物て仮物き新
おのるとーてはかく たりしら五年はうり前つかく家ふ
ハ四つとーとあり
○拾六歳ふなるとー時独り吟聖山を夜ある犯ーけるふ男ハ
くけ七人をかりれる山伏法師のかきものおをさんきり
てたてり君ふ和云そあもとはあれものそあもとひ君花の
もれなりとも我をたよも咎ふあとはえ行ふーとて打き
を君たきハ即かきけちて失ぬ其のちくも同ーさまに
ものせーこと三年の冬ふ古くひまてありける次人ふも
らはへき心寄おとらはりーとあり

○かくあやしき事六つなありてそれよりいくほともあらぬ
に碁のよの曉ふ盜ちかく兵衛ふりてなりけるを不よ
君若五郎ふ名をよふ人のありけふ即くあつらひてたちあ
れをちくふこやくくひのまをらひ
よまるとえ寄物ふりと云へー五十はかりの男我を山神の
使ふりをおををなにへきことありて迎ふたらをーめ
○君ハとく我ふりへふ行て来るへーとつふまくふ従ひて
おれほと白童のやうにて大路あるくを一町もゆぬふ
ふて大門の行ふを入ゆけを格段ふ犯ある家のいと
清くひろかれるに十七八なりれ女六人ありいたきら
ふりともふ分かくみれ咎ふくかき意をきよられ

そうぎきたるがあひ迎へてかの使の男はやく道
にていひけるゐ神をれかあらばにわ〳〵きものあらそをめ
よとのゆふへしそのはにいおれ小樋を給へと云へと
教へ至りるるはさしてさるおとありて即それを渇たり
ぬさて茶と菓子とをおしてゐ〳〵らひゆへりのちくのくびいもかあらば
茶と菓子とのこ也庭いいと広くて桃栗柿柹子梨あとやうれも
の成みちて大の一丈はかりあると我方言むく饅太きき馬
の数ちかひたるうひとつ鶴も百はうりむれ飛うり古の歌
ゐるはともいつもかてること多くありしとふりさて其ふ樋ハ玄年たり拾うけき
とあふひとうおかしてもとと思ふふおあらさやとと

さて城麻呂浄下町に火の災あるとしはかのゆ樊ゆの祝か
しこ来原茅ゆ家もやゆ矣てその家造りしはるはかしあよ
○行てもせしはるはとかのふ樋を紙へよの巻あかふあの
うへふ行至りるうそのほよかれふ樋いつくにゆ矣けん
なくありしとそそのたうかしたるのとみそそ
○かく仙境ふ行初しすり怪行人の心おこるはは月に二度
も三度もたくかるはの月ハ月に心ちしてゆけり樹猿
行年せりれと変のやう
ふあるるしとあり
乗るるゆもあれゆうう其ゆとてもゆんと思ふ心おあきも
其里斗よみちの程を祝ふ行うとりことゆ至けり

吳服ゐ立ありゐと思ふる時を待ちことかふたちをけり又
宮中に客人ゐとおたをやうのけをひ思ふる時え迷ふも
入やらぬ門よたちやあふひゐとしてあれたかしこに居
立所ゐ美てありたやくはへなとのすゝまともけりけを
○その客人をいうゐふるゐ方ゐやかのて姿をはみしことと
ゐくたてこゐくにた琴やふややとたへゐるものくねとも
きよゆることありけを
○女神のおて奥高れうちは張りふく高くて目もかくやく
たうりきよふたはりみかきくり出て假交めくものゐと
もみえ奥たくちいさき好と棚とのことありて好いつも

蓋をかゐひて火ゐとおおしたるたみ茶菓子ゐといい
○法もかのゐ十分ゐ立ゐふるまひて棚の中よりとをゐしけ
里きゐさより菓子ともなるはもをゐその棚よをさめた
まへり神の御衣ハ白ゐ高ゐくありてすそゐかくゐゐ人
里かゐかさちれうつくしきことといたんうてさゐく世にあ
るたくひにあゐたさて出おかさりハ人見れう人の事を
はのゐゐ事いゐんれとゐ高ゐゐ人ゐとかく出りしこと
又里れ女ゐとみたゐ見さりし事ともなとかぬてゐの里
○ふたゐゐたのゐひおてそれを前めゐふをハゐけれと笑
ひのくしりゐとしゐふ事なりしとそいつもさやゐゐのおりゐり
をみくしりしへくもあ

らねとそこなつてゐるにやあらふかとくとかくらるる

○宮の坐る所は此麓の山のほり七八町ばかり上此方也
とおもはるれと常はひらつくきのちげ山にてそおと
も云られ其と云へりさてゆんと云る者かくは服色かた
つとよろつ常やうあらぬことにあるを人くも見つけて
お仍あとをとゝ名て伝るものもなりなまと一町はかりゆ
くとみゆる所と彩もあくなりゝとそ　ゆうむ云るあらくのこ
とみつくくふるにの考へ
もあ
とそ

○かゝとふいとされる時そあるにお心よ祈てうき事あく又者
ひをはゝ一おとも祈らねとひとゝ豆金一歩金あとやうの

拍子之場なりゝ事時りそはみなたゝふつかひ若て里の
女あとにもあるへくらつゝ系を祈りゝ事ハたゝひくあり
けり真淡丸あとよ仍て味ひ甘しとそれも人くにあまて今はもあるに
はゝ病家の彩ひみよりて系をもひにまゐるゝ事なく
ありけりとされとかゝるうとそはかくく佐くしもへしもし
そもひにあん時は海ゝ毒ふれるおそるあそるへしと嬢
ひて戒めあるへ今年ナ鰻沢やうのもけも祈りゝと云へるをも
てたまふりゝあるへゝさるは佐ようゝ海をもて市にあ買ふくるも
のいりくきとよりの使人あとりと云事あり我方言仙洞をかくれとを
ひ夢草もて佐あるる
縁をのりら陳とゆ

○かくは通ひゝ事此さまを五年の月はかくく人おもらに

○ふとかの侍従のもとにおのの云へりけるを八年までいはら
み居たりその侍従康兄侍従の湯ものせられ
し時あく侍ふれし車ぶりしかの世にもれぬえうう
とそうして其赤松氏より菓子一箱を吉兵衛にあたへけて
山神にさらまつりは即夜をひてあるこより又こと菓子
をかへ一箱たりしとそ此事ハたやく世にぬえけるうた
しかのみさる事のうしとのへり又或人音侍ふ猟ふ仕かの色
しかたちをまねきて云ハくはるさひの物に仕相さ
るあらせ給へと山神に移うひやうるかく移れアせ
と仕給あらうんは神ありとも此山に至アさじうと

あそうれのやうに云たれてさて菓子一箱をならまつし
たはたる実此志ありてのうとさるふ兵ふと取あへ兵をり
もの也と神をいのの人へりとそ
○かく若ろりしはすりいくなとるく仕かよひをくハおそ
の八月もおとし此二月もかけるる二月の夜ふ神垂の宮
へるはそおもはふうくえうとてまらんの心あらは物子
の道をもたちてまるへしりさハりの心あらをとともか
くもぜよかしとのそふまるく今ハちかくもえつるへまう
らしとてそれよりいとまたまはてはうりはりぬきた
今はふつふうようふへきみちもたえ侍りきといへり（この侍の男も）

もと世ゐるよりわらはひて行くとくまれるものあらんばよりこの子
むかりとみえてくるうあれのちくもりなる事なりしとのべりさて
その子男は其母と庫院の侍中平氏部云永武家といひし人なる
べしとつふ説ありさるに此人先源年号比人にて芳傳ふとなりて仙洞
をなひしとつふことは世の人れなるにて橋東道の書うる西北記にも
みえたり今芳傳山年号物人なりとおく右の人をんることありとて
出の車は狂ふれもの共へ今其平氏に
つくへ来きる田記ありうつくへと記たり

○人の目ふも付てあやしきさまとは其子卯月ありふり
ふこと人よりは甚遠ふみてけて本を取来ねてひと
○つふくらんと出るひと蔓芋やうのもれ物ふて本にて
も行みてもるにふれたるもれてくれたよくくら
れてさて家かへりつく即あの母と被たりとて
件の相法ともは五月廿九日と六月三日比日と二度我說

皆よ浮雲りてまれあたり関有りたる也けるは同事を
歩遠よてもたつねる又異人ありやたり事ともの実者を
もつねしかふもくさくさつねし事をもくあるとけきとき
つはふふもやちへき事ふちと云へりさて常に花香ふ
ともの事て神を祭むまありやとたつねけるふさる事は
かりてしふちといへり六月三日四日二度かまとり家を
防ひてかれる事のけさといへるにもたつぬる事なりし
かと用ふて所る物後共世らるく事なけきは何事も知り
ふちといへり むかしと八伊ちら 源八姫 海と云へり

○六月廿日伊集院の神川村の事なりて花ぬけ是そやかの義

○なをの某い たしかみ仕おとれい今はあ〜にて四ツ〆へき
車もあら様と云れものかゝりともをあらくかゝりける
に浪傾門の名を体助を云ものゝ云へるあとはあのゝ曽
根又金兵衛ともの二十斗の時天狗の弟子にて書作山
ふとも四之年の冬に剣術と戦うつ事を習ひ始ゝりとて
作りさて天狗より婦ゝ〜とて強の六寸斗あるを
拵へて作りけるゝを利きるほや〜きまてみ作を大祝
又休ゝとて〜せ〜ゝそれを鍬の刃金に用ひんとて脇指
ふあつらへて作りしに金兵衛ゝ脇ひかゝく溶ふゝふ
ら〜拵て作りぬおのゝらもその強はよく見えて作り

作るゝ強ふくち指き事に作りさきと其打目〜形ふゝ作
ト作ふ世てそを形見ふ作へて作りとてとりおてみせ
たるを大かゝのゝりは厚ゝに高の紙ゝ〜くゝていとう
るハ〜く磨きふ〜たり 柄を二天はゝり ありけを山おてめ食和は
侯くゝとのくふ
ふゝり〜とふん
○かく紙をけるに卯六月十九日市麦に年芳仮岩を左ゝ
と云人神たひ宮りを行ひ来て作りけるはいふ〜年より
唐兄作の東に某 剣術師 能家也 病然ふひ殺ふ事行りてかの山邦
ふ茅乞ひの車ためゝとおあせ申入り改ゝは常ふおのゝ
家にお入るもれふ作とえやゝてその事あつらへ付作

ものしにいとやすきあとにて忽ちひねもすかへり侍りぬ其
くすりは白鳥橋と真珠丸のふたつにのみ侍りきさてそ
れをもて服したまひてやうく病もさそやきあるみより
て其侍れふとて菓子一箱をなりたまへるにその箱の隅
○の方北を一ッ文字とうあひてその北ふ文字菓子をもて入き
てかへし始なりぬさてかく改たつら行かよひしいふ
し春北ところふ侍りしを今まてかくく極おなてもらし侍
りさりしを今君北ふねたまふとのとりふけれてか
たをり北れりかくて又ひとりあやしき事ふ人侍りし
さるはそのころなのち家ふ住たりし次第の相えんとも

もよくくつくしむへきさよし神奈の宮へりとて改たつら
岩ら世侍をしにそのはしも家の葺易せんとて菅とも
ほのまくにたと金侍りしらは所それをとりのけふとふか
くれ心して侍りけきは何こともふく侍のきといへりさ
て前件くのあかくり共はおかくふ程をしことの北
ふるを今ちゝころの事をは宮重氏ふかくはあれあくり
ふかくてをきくふおそろし記まてあやしくふんおほえ
ける

○紙に記おとてし北秋日向の高屋諸縣郡にものしける時
物木村ふるく士物木牧ふと云へる人のあかくりに言

猪狩の小菅嶽（スガタケ）といふふ高ク岡ノ如ク猟ノ為ノ小屋ノ如キモノ
ありしを一日ことに張り立けるにあやしきもとちんか
かりたるにちるは大かたは人のかたちにて髪いとも
くろくみふもはひみちたりちてそれらいひけるい家
はもと人のむ所めりり今八数百年のむかし世ノ人みな
きたるとー附家をのうきおてこれ所芸はかりきた
るけるうそれよりふつふ人のみちをたちて処ゆふの
くひもとそてたる家木の実やうれものまてはり弥ーか
はおのれからかう形ちもあやしく成にけりけふーも
妹のあるあるよ迎えんとて夜中ふたちてもれーけるふ男

たんやかくるめふあをんとはいひてく我命をはかけよ
かしと後をおとしてこひけきとその言葉今の世の人ふてけたくうふはきくとりうね
そーといとふかーくやらひけんそのまく里へ入せかへ
りて女のまくかくらひまて強にそれ女を殺ーてけるさ
てそれ男いくほともなくやみ狂ふ事なりて死ふけ
るとかおは毒酒の事也とて男ノ名も所ーかをちれよけり
○大陽ふるふ所ノ日新流といふ山ちの信仙境に知れり
といふ事ありれおは康平源人久米村某云ちのもとか
たり也委くいのちふ四ひたく及へーー

以上

八田知紀識

かくのごとく書記して日月廿九日の便りに江戸へ法か
たしけるふ池田武純やらて平田翁よりみつかりもてゆて
見せまゐらせしよりかへり来りしるべ此文
尾角秋吳左兵衛殿安倍[illegible]殿[illegible]
[illegible]殿[illegible]
此序の記ハ七月平田翁へ拾来りて[illegible]
三十年来初て逆てこれとて来るもあり[illegible]
萬流ら志しるかの記ハ[illegible]の神のとくあらしめて
初紀武純をしてるをしあるつまあらんとそむ[illegible]
の日記弁ひ[illegible]ふる神の[illegible]

けをそやうてゆあ法うひ[illegible]門ふらしの[illegible]
文をかりてそれ法を[illegible]のやうに唱へたるを道ふ
志あるものゆきてあふ[illegible]
おのをこゝろよりこの[illegible]
人もあるべしなほあり[illegible]
ことあるべしなほ[illegible]
りきこゝろ[illegible]
[illegible]
序文あとに[illegible]
おまへ[illegible]
越り[illegible]の[illegible]序文[illegible]

下段にも表紙異なりては今日書き写し侍りき一くだりを
まとめ候ほど程なく書き申し候

八月九日　　　　　　　　池田武純

八田知紀大人

尾張の国名古屋なる津井才亮といへる者の子に
某の才一郎といひて年は十七になるがいにし
文政三年卯月のはじめ遠江の国秋葉山なる
神の山のみなもとにいざなはれておのれは神界（カミノサカヒ）
に入りてひとつきばかり有て見えずなりて世にいへる天狗
に誘はれてのちかへりしかどまた五ツ月ばかりを経て
又かの山にいたりて帰り来ぬ事なども聞えける
が其の年の十一月のころよりなにくれとなく物語せし
と聞きて稽古十二月の頃より目のあたりかたらひける

よびつどくわの松を切て家をこしらへたるのゞ
まつりやうやうの姿ハ月ゝ花々かくて又のやうし
十月ノ初ゆき板大きなるあつのけ山まで降るゆき
河とうやうなるぬけもの山ぬけもの山ぬけ蟲を
むしつくるつゝ沖のけさみゝかむかるといとく
ゆきの十二月といふりまきを鬼をなきて魂
さりなくなるあるくゝおどろきあるきこゑきく
かゝるものゝ世間ハ人ゝ見ハとゝかゝる
沖の世界ハ人ゝなるとゝ海よりなるいと

いろ〳〵こゝみあるゝ世きあそぶよオ一戸ゞ河原
粕田巻次祝ゝ文ゝ亮なゞ沖界のまゝ
河ゝ松山ゝ一戸ゞ長〳〵ゝ沖ゝ
物ゝ何ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
可怪ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
沖乃世使ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
世ゝ沖ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
所ゝ沖ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
ふゞ板の大森なゞ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ

よる日のくだりみなりて家ごとよそほひを齋(イツ)き
まつりたまふ世乃人とあはみも忘きて人これの
事なかりつゞら記わすれなほどまで彼よつけ
こ経よつ弁ゝ神の所のみぞれて久しぬはなるす
ども世にひつゞけを云此八田太人薩六分布郡よ
のがるまうで東て一条院乃よ唐のむなる
もやるよかみ乃つゐでよかう宮事なむ傳ふと
あやしあるとき二えんやうにゝるよこすも
同じく雨のうつゝえぞぞみさとの門文ゝは

神のれ坐り下りてありさまぞるあやしき記て
又此ま法西洋人日向霧島山(即ち高千穂の峯)にも
とて登りみる乃に山乃半腹(ナカハ)まで餓に人も
馬も皆死りけるみちを経ばさ法がに恐きて
云所よりかへるも、となむ、此山は皇孫命(スメミマノミコト)
乃天降りまし坐る山なれば、と異(アヤシ)きる
ども多く今現(ウツツ)に幽界(カクリヨ)ありて神仙(カミ)住給ひ
世にも有る所なるが、何如き従来(サキニ)もきこえし
神仙(イキ)の世をのこすまでぞ斯く尊(タダ)しとぞ申つる

実事（マコト）を書つらねて遠郷真語となづけ
一部印刷むあらそふ行ぐすれば
年歳今にいたるまでこれを行ぐ又改つ
てこのひそかにこの才一郎ち
事ハいつるぞ国ぐにあまたをも生つけ
これが附録あらはしてとなんかたるをう
行ぐ人ぞ多しなほ其投きこゝろ
なふぐしが沖のさうひまいくもの時ち世（アルサマ）を
件（コヂ）ふるくあるく西ふく四ふ一つ眼（マナコ）のあるを見る

こゝく沖だこゝろまきこゝ行ぐるをいとたこゝ
などこゝもおろうこゝかの才一郎があ行ぐこゝ
こどもこ文乃才亮ようこゝきこゝ学とるるこゝ
沖こゝこゝひあこゝすこゝのれあづまこれ流来
国物（カブ）事屋でこゝきどたのおこゝのあさのたぐふ
きあふを今こゝこゝむやこゝあ事どもこゝこゝ
沖のこゝ屋の測ひこゝがこゝ沖きむこゝをもけこゝを
はこゝこゝこゝひこゝ有（アルカツ）世をこゝかこゝこゝもうこゝこゝ
こゝこゝとのこゝこゝこゝだるとこゝ沖屋いるもこゝ男ち

三浦先生著

大矢田神蹟考

近刻　全一冊

此書八美濃國大矢田村なる天若日子下照姫天探女等の神蹟及藍見川の河ふる咫山の考へて古事記傳の附錄とすべき書なり

發行

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　通三丁目　山城屋佐兵衛
京都麩屋町通寺町西入　池村久兵衛
同三条通寺町東入　丁子屋源次郎
大坂心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　安土町　河内屋和介
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎
同　通四丁目　永樂屋正兵衛板

書肆

明治五年十二月十四日

拙速蔵君之備忘ニ写之

久保田又三郎 原蔵